

商人に取て非常なる驚異となるに至た。だが一般購買者も商品に對する二重或は三重の利潤に對する負担の荷重を考へるに至た今日、まだまだ消費組合或は購買組合の利用が盛に行はれるに至るだろう。

最近に於る 蠶糸業の動向

肥 塚 一 郎

蠶糸は國家産業の柱石であり、生糸は輸出の大宗にして——糸よく國脈を繋ぐ等々の形容詞、此の陳腐な慣用語に依つても、本邦産業界に於るその重要性を如實に物語られてゐる蠶糸業の最近に於る動向に就て少しく検討して見やう。

即ち今日一般に蠶糸業問題と呼べるものは、極めて複雑な模稜とした内容を有してゐるが、結局これを二つの観点より論ずる事が出来る。一つは自然科学的研究に依る技術的方面より、他は精神科學的研究に俟つ經濟的方面からである。

今私がこゝに論述せんとする所のものは即ち後者の方面からで——資本主義經濟を基調としてゐ乍ら、獨自的存在（半手工業的、農業經營の主要部門）を保持して來た蠶糸業が高變化した資本主義——帝國主義の今日に於て、如何なる方向にたどりつゝあるかを養蠶業と製糸業の現在に於る情勢並に兩者間に於る特殊的關係の推移から論斷するのにある。

即ち換言すれば本邦重工業と比較して、技術的に、經營上に於て遅れてゐると言はれてゐる製糸業が、亦大体中小農業經營の主要部門を構成してゐる養蠶業が——前者は獨占的段階の工業界に於て、後者は益々退歩の傾向にある農業に於て、共に如何なる状態に於てあるか、亦兩者間の關係如何を研究し、以て最近に於る蠶糸業經營形態の動向を考察するのである。

(I) 農業上に於る養蠶業の地位、

先づ養蠶戸數と農業戸數の關係から見て行く。

(A) 圖に表示されてゐる如く、農業人口の推移は、即ち日露戰爭當時から現在に至る廿六、七年間に約廿七萬戸——四分を増加したに過ぎないのに對し、養蠶戸數は約七十萬戸——五割の激増を示してゐる。此れを内地總世帯數と對比して見るならば、即ち農家戸數は實數に於ては僅少乍ら増加してゐるが、明らかにその割合に於ては漸減して行くのを見る。

これに反して、養蠶戸數は大体に於て一割六七分見當を保持してゐるから、本邦内地總世帯數の増加程度とほ

ゝその割合を一つにしてゐる事がわかる。

即ち現今に於ては農家戸數中約四割までが、養蠶を兼營（亦は主業）してゐるのである。

要約するならば、即ち農業の遂大的衰退と養蠶業の飛躍的發展——資本主義發展法則は、その發達程度にして心然的に農民粒々辛勞の結晶をあらゆる方法で奪取して行く。蒼ざめたその漸進的苦痛に耐へ兼ねた農民は、耕作地を廢して桑園に、農業から養蠶業に、或ひは農經營の副業として轉業して行くのが、數字の上に確知せられる。

即ち明治卅八年から昭和四年に至る二十有餘年間に、本邦内地の耕地反別及畑反別は約一割前後の増加を示してゐるのに過ぎないのに對し、桑園反別は殆んど二倍近くに激増してゐる。而も昭和四年に於て、耕地、畑地共にその實數をさへ漸減傾向を辿つてゐるのに反し、獨り桑園のみは漸増の一路を示してゐる。

養蠶は農業と技術的に類似してゐる点が多々ある——土地を基礎として行はれる事、季節的な事、機械使用の絶無なる事、目的が工業品の原料生産等であるが、こゝに農家經濟上特別の役割を務める事は即ち他の多くの農産物の如く、多分に自家用消費の推定價格を含むものと異なり、産繭の全部が直ちに販路用として現金収入を齎らす事である。

換言するならば、現金収入の少い農家經濟にとつては相當重要な役割——養蠶収入が其の現金収入の全部である事さへある。

而も農家一戸當の收入關係に於る米麥類と對比して見るに、米——三二二圓、繭——一五圓、麥類、——五四圓となり。亦養蠶一戸數のみに就て算出すれば、養蠶一戸當繭産額三〇四圓、米——三百二十圓その差額僅かに拾八圓である。

而も前述の如く、繭産それ自體が評價收入ではなく、生産と殆んど同時に換金し得る現金収入にあるのである。

如何に養蠶が農家經濟上重大な役割を占めてゐるか——昭和五年來の我が農村恐慌の益々深まり行く原因が養蠶収入の半減した事に依存してゐると謂はれてゐる事實より推しても、その間の事情が例証されてゐるではないか。私は農本位國たる吾國に於る養蠶業の占むる地位並にその重要性に就て論じて來たが、その將來への推移に關しては、論述の方法上結語に譲る事にする。

(二) 工業上に於る製糸業の地位及經營形態の動向、次に本邦工業界に於て占むる製糸業の地位並にその一般的動向に就いていさゝか検討して見やう。先づ製糸業の地位に就てゐるが、その爲には大体二つの尺度を以て測定する事が出来る。即ち第一はその工場數、第二は生産額の比較である。

第一に製糸工場数の比較であるが——本邦全工場数に於て、繊維工場の占むる割合は、約最も数の多い中小工場の比較に於ては約三三%。職工千人以上の大工場に於ては約七二%の絶対数に及ぶと謂はれてゐるが、此の繊維工場中に占むる製糸工場の地位を見て行ふ。

即ち繊維工場總數一万九千餘の中、首位は綿織物の二三%五に當るも、第二位は製糸工場の二〇四、第三位は他絹織物關係工場の一八%と優位を占めて居り、亦全國工場總數に對する比率を算出して見れば、次表の如く。

	50人未満	50—200	200—1000	1000以上	合計
製糸工場	3.7%	35.5%	44.3%	12.0%	6.7
絹物關係工場	7.6%	5.5%	3.3%	7.5%	7.4
計	11.3%	41.0%	47.6%	19.5%	14.1

で製糸絹物關係工場数は全國工場數に對して一四%を占め、特に五十人以上の大中工場に於ては四〇%以上に相當し、極めて重要な地位に在る事が了解される。

次のその生産高に依る見解であるが、本邦全工業總生産額中に於る、繊維工業のそれが、最近五ヶ年平均總生産額七十一億萬圓に對して約四割——廿九億萬圓を占めてゐるのを見れば、吾國に於る繊維工業の地位が如何に重要であるかを首肯する事が出来る。

斯くも吾國メイン・インダストリー中の王座を占有してゐる繊維業總生産價格廿九億萬圓中、蠶糸類は約八億五千萬圓を占め——廿九%の割合を以て首位を占めてゐる。

上述の如く、斯くも絢爛華々しい蠶糸業の現在に於る情勢は、資本主義經濟社會を基調とする以上、その發展法則を無視して論ずる事は絶対に出来ない。

即ち資本主義發達が高度化してゐる今日、その機軸は極めて複雑であり、少くとも常に増收、豊作を以てしてはその幸福は尺度し得ない。彼の最も華やかなりし頃——大正八、九年の大好況は、蠶糸家が注意するとしないうちに關らず、今や全く慢性的になりつゝあると謂はれその程度をさへ憶測する事の出来ない國勢的經濟大恐慌の波浪を受けて——日本に於る昭和四年の全國的金融恐慌以後、跡形も無くけし飛んで、急ち悲惨な暗黒のドン底に陥落してしまつた。

即ち市價の大暴落——大正九年一月に於る生糸一箱、四、四四〇圓の價格は例外として、年別一箱最高、最低價格は次の如くである。

年別	大正13	14	15	昭2	昭3	昭4
最高	2,228圓	1,998	2,702	1,531	1,436	1,225
最低	1,486圓	1,493	1,511	1,295	1,206	1,552

生産過剰——割合に生産組織企業形態の遅れた製糸業の無統制は

年別	大正13	14	15	昭2	昭3	昭4
供給高	406,032俵	429,640	510,797	526,572	550,632	587,595
消費高	393,913俵	443,322	498,554	523,466	549,093	498,052

斯の如き數字の出現依て明白となり、その無政府的生産に依る生産過剰に就ては多言を要しない。勿論、斯如き惡化現象の誘引は他の附隨的原因——金解禁に因る爲替相場の回復、人造絹糸の飛躍的進出、米國工業恐慌、銀地金暴落に因る支那生糸の輸出増加、生産高の増加等であるが、その根因は世界各國資本主義高度發達に基く、恐慌の深刻化以外に何物をもない。

斯る暗流に漂ふて、何等武器をも持たない製糸業の動向は？先づ此の問題を解く前提として、如何に製糸企業が他の重工業と比較して、その規模經營が劣つてゐるかを數字的に検討して見よう。

即ちその實証の一端として、會社組織の製糸業に就て見るに

	(單位圓)	(括弧内ノ數字ハ一社當リ)	
出資額及拂込資本金	積立金	純益金	
製一業 624會社	130,072,042	25,488,971	14,915,704
	(208,448)	(40,847)	(23,903)
綿糸紡績業 57	344,446,487	231,834,270	65,271,933
	(6,042,920)	(4,067,267)	(1,145,122)
石炭鑛業 105	276,810,535	25,868,288	11,711,498
	(2,636,300)	(255,888)	(111,538)
製紙業 152	160,104,134	38,341,227	21,688,444
	(1,053,974)	(252,245)	(142,637)

その社數に於ては首位を占むるも、一社當りの資本額は僅かに四十萬圓餘に過ぎぬ。而も眞に實力を現はしてゐる資本額總計は一億三千萬圓餘で、一社當り平均二十一萬以下、積立金總計も約二千五百五十萬圓——一社當り僅かに四萬圓餘に過ぎない。之を要約すると、製糸會社の實力は一社當り二十五萬圓程度の貧弱さである。

等しく我が他の重要輸出産業會社として完全カルテル組織に迄發展した綿糸紡績、石炭鑛業、製紙業と比較するならば、その内容に著しい懸隔のある事がわかる。

比較的に充實してゐると傳へられてゐる會社組織に於て然り、個人經營其の場合には更に貧弱なる事は論を俟たない。即ち會社組織に於る一工場平均的數は約二〇〇釜であるが、個人經營のそれは僅かに六十五釜に過ぎない。

斯如く他工業と比して、正に立遅れた親のある製糸業の動向は

年別	大正13年	14	15	昭和2年	3	4
十釜以上	3,12	3,21	3,449	3,642	3,791	3,976
十釜以下	193,608	181,841	88,311	79,935	72,299	65,431

即ち大經營の小經營制覇に外ならない。郡小製糸の間、郡是、片倉が俄然頭を抜いてゐる——全國製糸釜數

九万六千九〇の中一萬八千六百十三は片倉に、八千五百八十一は郡是に屬してゐる。即ち兩者で、全國釜數の約36%を占めてゐるのだ。

而も最近（昭和六年）に於る製糸業の惡化は殊に甚しい。生糸價格は、十二月前後一時反騰したが、三月下旬からは急步調となり、今では最も深く下底まで落込んでしまつた。其の上、例の糸價保償法の病的存在——保償糸二十萬梱を保管する事による此の糸價暴落の防止對策は、反つて必然的に米國市場の惡化を招致し生糸恐慌の促進に鞭打つ結果となつた。

斯る際、貿易商に信用の厚い大製糸家は、約條と謂ふ期限付見込價格取引によつて、幾分なりともその打撃を緩和し、或ひは生産費を極度に切下げる事によつて、その犠牲を養蠶家に轉化する手段をも採る事が出来る。

殊に非常手段としての三月一杯全休の如きはその一例で、息も絶へ絶へな中小製糸家にとつては致命的打撃とも言ふべく——此の爲にへたばつた製糸家は一千もあらうと言はれ、はつきり閉鎖した工場だけでも何百とある

斯くして何等防備のない中小製糸家の没落は鳴物入で急調に、而も大企業家による遅れた製糸業の獨占形成は具體化して行く。然し最後に一考を要するのは、没落の必然的過程ある小製糸家最後の防衛手段——製糸家と養蠶家の單一的經營——組合製糸の存在だ。即ち原料繭生産者と生糸販賣家の單一合同で、自家勞働供給に基礎を置き、組合員の供繭によるものであるが、これとても定められた運命の前には、頽勢を挽回すべくもない。即ち組合製糸經營は、工場能率以外に組合員の供繭能力と言ふ事に考慮を要する。換言するならば、大經營に無理にも對抗せんが爲には、抱擁力以上の組合員を獲得するか——此は地理的に不可能の場合が多い。或は經營規模擴大の爲他より原料を購入する様な結果にもなる。然し組合製糸が他から原料を購入する事は自壞作用の表現でなければならぬ。

又一方技術的方面から觀察するならば、水質の相異、原種の不統一、家内工業による技術不熟練の爲、製品の不統一、引ては市場に於る劣敗ともなる。それのみで無く現在具體化しつつある工場の法定規準の擴大化——免許制度の出現である。

即ち本格的に國家統正による資本、企業の集中、獨占組織の前提だ。

その内容は——二百釜未滿の經營を法によつて許可せぬと言ふ——徹底的小經營の撲滅手段、資本主義現段階に於る遅れた製糸業經營形態の將來への動向の一端はこれなんだ。中小製糸家が存続する爲の唯一の手段——組合製糸が今後十年後に實施さるべき免許制度の採用による如何なる結末を遂ぐべきか、前言と對比しつつ數字的に

再檢して見やう。

昭和三年現在に於て我が組合製糸場數は四〇〇（十釜以上）にして、其の釜數三萬四千餘で一工場平均釜數は八十五に當る。尙詳細に内譯して見ると、十釜——九十九釜＝二八七工場、百釜——百九十九釜＝九十二工場、二百釜以上——二十一工場である。

即ち四〇〇工場中、許可されるべき工場——二百釜以上の工場はその數、實に僅か二十一工場、0.9%にしかならない。殘餘の三百七十八工場——組合製糸工場數の約90%以上は強制的に經營の自由を奪取されなければならぬ。斯くて獨占組織確立への前提條件の具體化、背後に政略を通して動く金融資本の操る糸は益々鮮明となつて、彼の生糸界にはいゝむ時も遠くはあるまい。

（三）現代に於る生糸對養蠶關係。（結論）

生糸業と養蠶業との關係。その本質を掴むには農業問題に於る都會對農村の有機的關係——搾取被搾取の關係を思ひ起せば足る。

即ち資本主義發展の高度化した今日、養蠶業は必然的にその發展法則に追隨し、以てより高度の利潤を求めて止まない現情を眼前に見て來た。然し養蠶業經營の目的は一般人々の熟知せる如く、大体小農經營の部門として經營されてゐる限り、如何に流通經濟に進出しようとも此れを簡単に養蠶業の營利化として片づけて了ふ事は出来ない。

即ち養蠶業の經營精神が高度化しつつある生糸業經營の營利觀念とは異なる事を認めなければならぬ。

成程養蠶業經營も一應は最大可能の貨幣收益を追求してゐる如く見へるも、産繭の販賣は一節に述べられた如く、收益利潤それ自體が對象では無く、唯だ農家唯一の現金収入源——家計上必要缺くべからざる所のものである事を忘れてはならない。斯くして、資本主義經濟の桎梏を逸れる丈逸れんとする養蠶業と何物をも獨占化せずには置かない發展過程にある生糸業間の本質的矛盾は益々搾取被搾取の支配關係を深めて行く。

家畜以上の勞働を強ひられる彼等、早朝より起き出で夕べには星を仰ぎて歸る、而も産繭時期には徹夜さへもして生活の爲に働く彼等に、何んで營利觀念を求める事が出来ようか。

私は紙數の關係上簡単に兩者の關係を、實例を以て指摘して行こう。

先づ常態に於る兩者の關係——乾繭倉庫を持つ事の出来ない事に依存する生繭取引による生糸家の思惑買は、血と汗で作られあげられた彼等の結晶を最大可能の安値にまで追ひこまなければ止まない。即ち生繭の保管期間は約一週間前後、それ以上になると繭は發酵して了つて役に立たない事になる。其處を見込む生糸家の惡辣な手段

が此の思惑買なのだ。

常態に於て之である。今日の様な非常時に於てはそんな生ぬるい手段を取らない。即ち生糸資本家の養蚕家への犠牲轉嫁の企圖が強行されるのだ。その實例として昭和五年の糸價補償法發動直後の繭價は、こつびどく叩き落された。その内容を當時の新聞の報導によつて要譯して見るならば即ち生糸家は

「沼津の春繭初取引は別項の如く買なれ四十六がけ見當となつたが、此の生糸百片について見れば繭の原料代は七百三十六圓となる。此れに百片當りの製糸家の加工費を三百圓と見積れば、百片の生糸價格は千三十六圓となり、更に此の加工費を安く二百五十圓と見れば原價は九百八十六圓と言ふ計算になる。然し之を昨今の清算市場の相場に於る新糸の斯近物に比較すれば、二十數圓の逆算となり、大體安當の相場と有力製糸家は見てゐる。然し、製糸家は右の他副収入として、くづ物代並に相當の格上に依る利益があるから、春繭が四十六がけ見當である限り、特別に加工費の高い製糸工場（中小経営を指す）を除き昨今の相場ならば、大體採算がとれるものと見られてゐる。」

而るに一方養蚕家は

「昔の沼津の初繭取引をきつかけに今後各市場に春繭出廻殺倒すべく、而も近く實行せらるべき約二割の生産調節干渉倉庫の不足、干渉設備の不備、銀行の擔保價格の引下げ等は何れも春繭安の原因となり、加ふるに製糸家の買叩き戦術は益々春繭安を招來し、結局糸價低落にする犠牲は全部養蚕家に轉嫁せられる事になりつゝある。」

事實一九三〇年の春繭のみによる養蚕家の損失は、約一億八千万圓と言ふ莫大な額に達したとの事である。

而も生糸業の資本主義的發展進んでは獨占組織確立の爲、その前提條件の具體化——最大可能の利潤の追求は養蚕生糸業生産組織の單一化と特權化に論結されるだらう。

繭の特約的正量取引と言ふ美名の下に、勝ほこつた大生糸資本家は多くの養蚕家をその支配下とするか、亦是養蚕家を生糸會社の株主とする遙有制度を採るか、その何れとも原料繭生産者と生糸生産者との單一化である。即ち斯る單一化は養蚕家との接觸に際しては、可能的にその利潤を搾取するに都合の好い又体裁の好い機構である事は言ふ迄もない。

斯くして、一時的な好況の際僅かの涙金によつてつられた農民達は、果して養蚕に轉業する事に因て資本主義經濟發展法則に基くその矛盾を完全に避け得たであらうか、餘りにも悲惨な事實は益々彼等の重荷となつて、茨に圍れ骨身までけづられて行く、あても無い血と汗の旅路は、果て知れぬ先まで續いてゐる。

斯くて確かに國家産業の柱石であり、確かに一糸よく國貨を繋ぐ來た養蚕業は、金融資本の笑顔の下にほこら

かに彼等の忠實を誓言し、その犠牲を農民に轉嫁し、或ひは消費者に、中小生糸家へと強制する事によつて、高度へ高度へと發展して行くだらう。

—1932, 10, 12—

新刊紹介

谷口吉彦氏著

購買力補給案(ネオ・インフレーション)

諸井忠一

私は、此の書を、その理論的價値の故を以てて紹介しようとは思はない。到底眞面目な批判に耐へ得るものではないからである。然もこゝに紹介するのは、この書が近來頻々と刊行される、公然のファシスト諸氏の著書や宣言の頭に於ける理論的進出の、援護射撃の役割を果たすであらうと言ふ點である。著者の意圖するところの如何に拘らず、未だ一貫した經濟理論体系を持たない日本のファシズムが、こゝから一定の榮養を吸ひとり得るであらう。

資本主義の枠内に於ける「計畫」經濟に就て多くの人は語つた。然し乍ら谷口氏の進出は、ファシズムの社會的基礎である小ブルジョア階級を眩惑するに充分な俗人的論理をもつてなされてゐる。それは金融資本のヘゲモニーの、より一層の強化に、拍車を加へるに外ならない。「計畫」經濟論の、客觀的結果を隠蔽し、零落せる小ブルジョア階級に——勞働者農民にさへも——「明日」の想を與へ、ファシズムの地盤を強化する。このデマゴギツシユな理論は、それ自身無價値な路傍の草であるとしても、これが一定の階級を背景として進出する時の政治的力となる。この事を意識しつつこの書に接する時、人々は興味深い多くのものを吸ひとる事が出来る。

(二)

「百の理想案よりも一つの實行案」として自負する、この購買力補給案を、私は各章に拘泥せず、次に出来るだけ著者の言葉をもつて要約するであらう。何となればこの書は、諸雑誌に發表の諸論文が、そのまゝ集録されてゐるため、重複の煩雜さを持つてゐるからである。再度、否數度繰り返すことは、此の理論を強調するに、力ありとする意圖から出たものであるかも知れない。ともあれ、私はこゝでそれを追ふ譯には行かない。

購買力補給案とは如何なるものか。それは、「今日の恐慌の核心が、國民購買力の不足にある事を卒直に認め